



2013年(平成25年)

1月号(No. 812)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

山岳気象予報の現状と今後の可能性について	1
尾瀬問題の意見書提出とその後	4
岳都・松本「山岳フォーラム2012」で「山の日」制定運動をアピール	5
板倉勝宣・松尾峠遭難90年	6
追悼 鬼軍曹、松永敏郎さん	7
東西南北	8
伊藤秀五郎詩集「山の風物誌」作曲される	
活動報告	9
総務委員会／図書委員会／自然保護委員会／山の自然学研究会／NPO富士山測候所を活用する会	
支部だより	13
東海支部／四国支部	
図書紹介	15
図書受入報告	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
新入会員	18
会員異動	19
INFORMATION	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

山岳気象予報の現状と今後の可能性について

山岳気象予報士 猪熊隆之

現在では、ヒマラヤ登山やツアー登山だけでなく一般登山者にも広まってきた山岳気象予報。山岳気象を専門とする猪熊隆之さんに、山岳気象予報の現状と今後の可能性、ユーザーとしての効果的利用方法などについて、綴ってもらった。

山岳気象予報の現状

2007年12月に民間気象会社で山岳における気象予報を開始してから5年になる。山岳気象分野では飯田睦治郎さんや、城所邦夫さん、村山貢司さんなど諸先輩方が、安全登山のために一般登山者への気象講座の開催や、山岳気象に関する本の出版などを通じて、山の天気的重要性を広めることに大きく貢献されてきた。

しかしながら、私が山岳気象予報を開始した当時、一部の情報発信を除いて、ビジネスとして気象予報を行なっている気象会社や気象予報士は存在しなかった。

現在、気象庁の気象業務許可を受けて気象業務を行なっている個人、会社等は60社あまりだが、そのなかで山岳気象を専門としているのは、私が代表を務める株式会社ヤマテンのみである。それは、

山岳気象予報の専門性や、登山者向けの予報は予報会社のリスクが大きいこと、登山者に限定されたマーケットでビジネスとしての魅力がない、ということがあったからかもしれない。

ビジネスとしての気象情報配信による、利用者のメリットとしては、気象に詳しい知人などにボランティアで依頼する場合と異なり、定期的に必要なる情報を手で得ることや、予報業務許可を取得している会社からの情報なので、予報に必要な数値予報等のデータを生成した科学的な根拠に基づく予報が得られることである。ただ、山岳気象の場合は、後述のように、数値予報のデータが当てはまらないことも多いため、山岳ごとの気象特性を把握した気象予報士の存

在が絶対に必要になる。このため山岳気象に精通した人材を育てることが、山岳気象を配信する会社にとって何よりも重要だ。

ヤマテンの山岳気象情報

山岳気象情報といっても、その内容やニーズはさまざま。

現在、ヤマテンでは登山、トレッキングを扱っている旅行会社や、テレビや映画の撮影隊、ヒマラヤや天山、アンデスなどの登山隊、山小屋、スキー場、山岳有料道路と契約して気象情報を提供しているほか、一般登山者向けには、「山の天気予報」という全国15山域の山頂の予報をウェブ上で掲載したり、メール配信をしている。また、当会の雪山天気予報、春山天気予報も担当している(*1)。さらに、

各種講習会や、観天望氣を学ぶハイキングなどを通じて登山に役立つ気象知識の普及に力を注いでいる。

山岳気象情報の特性と注意点

現在の天気予報は、数値予報を利用している。数値予報とは、現在の大気の状態を観測データなどから決めて、大気を支配している物理的な法則にしたがってコンピュータで計算し、将来の予測値を出していく、というものだ。つまり、コンピュータが将来の気象状況を計算してくれるということになる。日本では、どの民間気象会社も気象庁から数値予報のデータを入手し（正確には気象業務支援センターから購入する）、それに基づいて天気予報を組み立てる。したがって、どの気象会社も同じデータを利用することになるので、予報にそれほど大きな差は出ない。テレビなどで発表される天気予報が各局で大きな違いがないのもそのためだ。

さて、数値予報が100割当たれば、人間の頭脳は要らないのだが、そうはいかない。それは、数値予報で使われるモデルは実際の

地形とは大きく異なることや、数値予報の元になる観測データが少ないヒマラヤやアンデスなどの辺境地では数値予報の精度が大きく低下すること、さらに数値予報で表現する雲の生成や降水が発生する仕組みが実際とは微妙に異なっているからである。とくに、山岳地においては、観測データが平地より少なく、地形のモデルが実際と大きく異なることから、数値予報の予想値をそのまま当てはめることができないのが現状だ。そこで、気象予報士の経験と知識が生きてくることになる。

ところが現在、検索エンジンなどで出てくる「山の天気」や「登山天気」などは、そのほとんどが数値予報のデータを変換して使っており（あるいは、そのまま数値予報のデータを表示している予想もある）、気象予報士の修正を経ていないものがほとんどだ。とくにピンポイント予報は、何百カ所というポイントを数時間おきに発表しなくてはならないから、とても気象予報士が修正することはできない。自動的に計算式に基づいて天気予報が発表される仕組みだ。したがって、登山者がこれを利

用するときには注意が必要だ。最近ではGPSを利用した、現在地にもっとも近いところのピンポイント予報が表示される便利な機能もあるが、このポイントが目的とする山岳の風下側の天気予報の場合、稜線や山頂付近と天気が大きく異なることがある。

09年のトムラウシ山の遭難事故においても、事故をおこした旅行会社の登山ガイドは、山麓のピンポイント予報を利用して、「天気が回復すると思った」と話している。また、こうした天気予報は、「晴れ」あるいは「雨」など天気マークで表示されるので、利用者はそれ以外に解釈のしようがない。したがって、登山においては情報を鵜呑みにせず、出発前に必ず予想天気図を見て、自分なりに幅を持って解釈することが重要だ。情報を使う場合には、天気図や観望気などほかの要素とあわせて利用するのが望ましい。また、多くの気象情報のなかから精度の高い、信頼できる情報を利用者が選ぶことが求められている。

経験や五感も大切な要素

しかしながら、それでも100

割ということはない。「想定外」を少なくすることが、リスクを減らすことにつながることは事実だが、「想定外」を0割にすることはできない。そして100割がないことが、つまり「想定外」を楽しめるのが、アウトドアをフィールドとしたスポーツの魅力だ。なかでも登山はその要素が強い。

したがって、予報技術だけでなく、経験や五感を大切にすることが、登山においては重要なことであるように思う。

具体的には、自分が予想した天気と実況がずれてきたときに、雲の様子や風の変化、湿度や温度の変化を体で感じて、なぜ自分の予想と違ってきたのかを推測し、予報を修正していくという作業を行なう。その後に予想される危険を察知して、パーティの安全を確保する。そして、自然が発するサインを見逃さないようにすることだ。落石があったときに、ブーツと歩いていたり、音楽を聞いていて、その音を見逃してしまえば、避けられたはずの落石をともに受けてしまうかもしれない。雪崩に関しても同様だ。足を踏み入れたときの「やばい」という感覚が命を救

うこともある。

また、想定外の事態が起きたときに対応できる力をつけることも必要だ。せっかく、天候の変化を読めたとしても、ビバークした場所が風雪にさらされる場所であったり、ツェルトの張り方が不十分で、長時間持たなかったり、雷を避けるのによい場所を想定していなかったり、ある程度の風雪や低温に耐えられる体力や精神力がなかったり、悪天にかまるまでに悪場を抜けるだけのスピードがなかったりすることが、想定外の事態に陥ったときに生きて帰る可能性を減らしていく。「登山力」を身につけることは、登山者にとって何よりも大切なことだ。

山岳気象予報の今後の可能性

ここまで数値予報の悪い点ばかりを取り上げてきたが、現在の天気予報において、数値予報はなくてはならないものとなっている。そして、その精度向上が、観測データの少ないヒマラヤ、アンデス、極地などの辺境地における天気予報を可能にしたとも言える。今後新しいモデルの開発によってさらなる精度の向上が期待される。

現在、気象庁が運用している数値予報モデルは、20[※]格子間隔の全球モデルと、5[※]格子間隔のメソモデルの2つであり、全球モデルは主に、翌日や翌々日の府県天気予報や週間予報に利用され、メソモデルは翌日の予報や、数時間先の降水予想などに使われる。

これに加えて気象庁は、局地モデルの開発を行なっていて、すでに12年8月から一部地域で運用を開始しており、13年度中の日本全国での運用を目指している。2[※]間隔のため、実際の地形に近い表現が可能となり、降水の地形的な影響を細かく表現できることが期待されている。しかしながら、メソモデルは最大33時間先までの予想値が計算できるのに対し、局地モデルでは9時間先までの予想なので、翌日や翌々日の予報では使うことができない。これらの予報ではこれまでのように、全球モデルやメソモデルを利用することになるだろう。

一方で、数時間先までの局地的な降水強度、降水域の移動などの予測は、精度が向上すると思われる。また、この初期の時間帯の精度向上が、全球モデルやメソモデル

ルの予想精度向上に寄与することもあると期待できる。

こうした、数値予報モデルの進化によって、予想精度は少しずつ向上していくだろうが、コンピュータでは予測できない部分は必ず残る。山岳の気象は、高度や地形、独立峰と山脈、海洋との距離、土地被覆の違いなどによって気象条件は千差万別である。その複雑かつ、局地的な気象状況を予測するためには、やはりその山を実際に知らなければならぬし、予報の経験がものを言う。また、予報を発表し続けていても、検証を行わなければ、予報精度は向上していかない。そのため、実際の天気を登山者や山小屋からの報告や、ライブカメラ、衛星画像、レーダー・エコー合成図、解析雨量などから推定し、外れたときはどうして外れたのかを検証していくことが重要だ。気象予報士は、ある意味職人である。日々の地道な努力が、天気予報の精度を向上させると思っている。

また、山の天気予報で求められるのは、登山者が行動可能な天気かどうか、登山者に危険を及ぼすような気象状況になるのかどうか

である。つまり、登山者の視点に常に立つて、単なる天気予報にとどまらず、雨や雪がどのくらいのも量降るのか、表層雪崩の危険性が気象状況から見て高いのか、風がどの程度吹くのか、気温の上昇による落石やブロック雪崩の可能性が平常より高いのかどうかなど、登山者の安全と、登頂チャンスを見逃さないという観点から気象を予測することが大切で、ただ天気予報を出せばいいというものではない。

偉そうなことを言ってきたが、私自身もまだまだである。このような、登山者のニーズに即したプロになること、そしてプロの集団を作ることが、私の現在の目標である。

いのくま・たかゆき

中央大学山岳部出身。山岳気象予報会社「ヤマテン」(<http://yamatenki.co.jp/>)代表取締役。

*1 年末年始、GW、お盆などの連休中に北アルプス北部、南部、八ヶ岳の3山域の天気予報をメールにて配信。気象予報士は猪熊さん、運営は日本山岳会。登録方法については毎回、日本山岳会ホームページ「日本山岳会の活動案内―山岳支援事業」から案内する。

報告

尾瀬問題の意見書提出とその後

自然保護委員会

2011年3月11日の東日本大

震災後に発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故が深刻な問題を生じ、東京電力が経営危機に至り、実質的に国家管理状態になっていることは周知の通りである。

東京電力は、わが国の代表的な自然景観地「尾瀬」の4割を所有し、年間4億円(うち木道整備費2億円)を維持管理のために拠出している。経営難の同社が今後もこの体制を維持できるか危惧されるなかで、当委員会でもこの問題を重視し、その対応を話しあった。その結果、このような大きな問題は、一山岳団体が単独で動くのではなく、わが国の主要山岳団体が構成する「山岳団体自然環境連絡会」(以下、「連絡会」と略す)で対応することが必要との結論になった。

連絡会では慎重な協議を重ね、環境大臣あてに意見書を提出することになり、当会でも4月の理事会で承認された。その後、7月と12月に環境省の担当部署である国立公園課との懇談の場が持たれた

のを機に、経過報告する。

なお、当委員会としてもこの問題を含めた尾瀬の諸問題について「尾瀬を考える」をテーマに、6月末に自然保護全国集会を開催したところだ。開催報告は、会報2012年8月号に、また詳細は「木の目草の芽」99号と100号に記載されている。また、「山」の7月号の「東西南北」欄では、田村義彦会員からも意見が寄せられている。

意見書の概要

本年4月、連絡会では、「尾瀬国立公園の自然環境・生態系保全を継続的・安定的に行なうための意見」を環境大臣に提出した。

東京電力は、福島第一原子力発電所事故により、尾瀬の維持管理のために、これまでと同じ水準を維持することは困難であることを表明している。このような状況から、尾瀬の貴重な自然環境を後世に引き継いでいくためには、国の責任で管理運営していくことが必要との認識から、連絡会として、尾瀬の土地を国有化、国の主導的

管理についての2点について環境大臣あてに意見書を提出した(詳細は、自然保護委員会のホームページ参照)。

その後の経緯

本意見書の提出を契機として、環境省から、連絡会とザックバラに話し合う場を持ちたいとの提案があり、7月10日と12月17日に懇談会が開催された。

席上、環境省からは、基本的には、意見書には異論はない。しかし、尾瀬の土地の国有化については、環境省の限られた予算では難しい。また、管理については、東京電力は「以前の管理を維持する」と明言している。環境省としては、「見守って行く」との意向を示した。

一方、連絡会側は、「実質的に東電が国有化されている今こそ国が尾瀬を管理する絶好の好機である」と主張し、立場の違い・意見の違いが認識された。その他、シカ問題、入山料徴収、利用者負担等々、自然環境保全に関して幅広い意見交換が行なわれた。

今後も懇談会を定期的に開催することに賛成の意思表示があり、定期的に開催することになった。

今後について

今年度に関しては、従来どおりの管理水準を維持しているので安心であるが、今後の問題として、東京電力は、原発事故の補償問題や電力料金アップ等の厳しい経営環境の中にあるので、今後も充分注意して見守っていく必要がある。

(富澤克禮・森武昭)

山岳団体自然環境連絡会は、公益社団法人日本山岳会、社団法人日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、社団法人東京都山岳連盟、NPO法人日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、NPO法人山のECHOの六団体の自然保護担当者によって構成されている。また、昨年12月からは、公益社団法人日本山岳ガイド協会が加わり山岳七団体の構成となっている。

イベント報告

岳都・松本「山岳フォーラム2012」で「山の日」制定運動をアピール

北アルプスの玄関口として親しまれている松本市で、2012年11月25日、「岳都・松本」「山岳フォーラム2012」が開催された。これは、山の魅力を発信し、併せて「山の日」制定に向けた機運を高めようと2011年から始まったイベントで、会場となったホテルブエナビスタには、さまざまなワークショップが設けられた第2会場と合わせて約1500人が来場した。



親・子・孫の3世代による山岳ファッションショー

萩原浩司

山岳フォーラムの第1部は「3世代で楽しむ山スタイルショー」。日帰りトレッキング、山小屋泊登山、スノーシューハイキングの3つの山行パターンに合わせた山の装備について、ファッションショー仕立てで紹介がなされた。

一般公募で集められたボランティア・モデルたちが最新の山岳ファッションに身を包み、親・子・孫の3世代を代表してモデルウォークを披露。同時に、装備についての注意点が画面で紹介され、安全・快適で楽しい登山のためのノウハウを織り込んだステージとなった。

続く第2部では、俳優の市毛良枝さんが「私に元気と健康をくれる山」をテーマに講演。もともと運動嫌いだっただ市毛さんが、ふとしたきっかけで山登りに夢中になっていった様子が語られ、爽やかな笑顔と軽妙なトークで聴衆を魅了した。

第2部の後半では「山の日制定



「山の日」制定運動の経緯を説明する尾上会長

に向けて」をテーマにした報告会が開かれた。ステージには坪田明男松本市副市長、当会の尾上昇会長、山の日制定協議会の成川隆顕代表幹事の3名が登壇。山の日ネットワーク東京会議の報告に始まり、「山の日」制定協議会の、これまでの活動の経緯が成川さんによって説明された。

そして3人による報告のなかで、「山の日」は単に山に登ることを目的とするものでなく、すべての国民が山に関心を持ち、山や自然を大切にして次の世代に残そうと考える意識付けを主眼としたものであることを強調。協議会が提唱する6月の第一日曜日を「山の日」

に制定しようと、会場を埋めつくした聴衆に向かって理解と協力を求めた。

第3部は「北アルプス山小屋サミット」と称して、涸沢ヒュッテの山口孝氏、槍ヶ岳山荘の穂苅康治氏、燕山荘の赤沼健至氏、穂高岳山荘の今田恵氏の4名によるシンポジウムとなった。登山者事情の変遷を振り返りながら、近年は山小屋に夜遅く到着する登山者が多く、安全のために早出早着の原則を守ってほしいということや、ストックによる土壌浸食の被害現状を伝えて使用法の注意を促すなど、現場からの切実な訴えに参加者は真剣に聞き入っていた。

なお、フォーラムと並行して第2会場では登山用具メーカーや地元観光協会などが出展してイベントを盛り上げた。山の日制定協議会でも独自のブースを設け、すでに「山の日」を制定している県のポスターを展示し、パンフレットを配布するなど、広報活動を展開。

フォーラムでの報告会と併せて、来場いただいた多くの人たちに「山の日」をアピールできたものと思われる。

ヒストリー

板倉勝宣・松尾峠遭難90年

学習院・山桜会

大正12年1月17日、暴風雪の立山・松尾峠付近で板倉勝宣は26歳の短い人生の幕を下ろした。北海道帝国大学を卒業し、京都帝国大学理学部植物教室の大学院で研究生活に入る直前の遭難であった。

板倉は学習院時代に登山とスキーを始めた。大学のなかった学習院高等科卒業後、北大に進んだのは雪を求めていることであった。北大在学中には昆布岳、余市岳、ムイネシリ岳、旭岳の積雪期初登頂を果たした。自ら発刊したわが国最初の山岳雑誌『山とスキー』に

「各人の個性にふさわしい山の味わい方が内面的にのみか外観的にも分かれてくるべき時が来たのではないか」、「ここにおいて動的な山の味わい方すなわちロッククライミングとスノークラフトとが現れてくるべきではないだろうか」と登山の方向を明瞭に示した。

大正8年3月、常念乗越を経て槍沢から槍ヶ岳をうかがい、天候悪化で上高地へ下ったが積雪期の槍ヶ岳登頂を確信した。大正10年

4月初旬、再度槍ヶ岳登頂に挑み、小槍の標高より少し上まで進み、翌11年3月の横有恒、松方三郎(学習院)らの槍ヶ岳積雪期初登頂に道を拓いた。

遭難時の同行者は、横有恒(29歳)、三田幸夫(23歳)の慶応義塾山岳会出身の2人であった。

横は大正10年アイガー東山陵を初登攀。後に大正14年カナダ・アルバータ峰に慶応・学習院合同隊で挑み、初登頂に成功。日本の近代登山のバイオニアとして活躍。日本山岳会会長などを歴任、昭和31年第三次マナスル登山隊長として日本人初の8000メートル峰の初登頂へと導く。

三田は前述の積雪期槍ヶ岳初登頂に参加。遭難翌年の大正13年春には積雪期奥穂高岳初登頂。アルバータ峰登山隊にも参加。昭和28年第一次マナスル登山隊長、後に日本山岳会11代会長を務める。

大正12年1月6日の朝、3人はカメラマン2人、芦峠寺案内人夫衆10人と芦峠寺を出発し、14日、



板倉勝宣遺躑之碑

松尾峠から東に寄った鞍部を露营地とした。15日、3人は一ノ越に向けて出発。天候は昼過ぎ頃、室堂付近で悪化。登高を諦め露营地へ戻る途中、天狗平あたりで突風が3人を将棋倒しにするほどの暴風雪となった。道を失い彷徨が始まり、睡魔と寒気との闘いのピーク。16日も暴風雪は続いたが、なんとか午後3時頃露营地に到達した。だが木綿の薄着と毛皮だけの芦峠衆は凍死を避けるためにすでに立山温泉に下っていた。この頃には板倉の体力は消耗しきって意識が遠ざかることを訴える状況になっていた。松尾峠から30分ほど下ったところで板倉のスキーが

先を下に深く斜めに突き刺さってしまい、腰を下ろした。それが再び立ち上がることはなく永遠の躑きとなり、午前零時57分に息を引き取った。

大正14年11月、板倉の死を惜しむ関係者と芦峠衆によつて芦峠寺共有地の一角に『板倉勝宣遺躑之碑』が建立された。長い年月の経過とともに忘れ去られていたこの碑を、平成16年に草深い杉林の中に見つけ出すことができた。

平成25年は遭難90年にあたり、学習院・山桜会は、芦峠寺総代・佐伯信春ほか有志一同、立山ガイド協会、日本山岳会富山支部の共催をいただいて4月6日(土)広く一般の登山愛好家も対象として、芦峠寺において午後2時から講演会を開催するとともに、7日(日)碑前にて午前10時から遭難90年祭を開催することになっている。





松永敏郎 (まつなが・としろう)

1933年 静岡県静岡市に生まれる。
1956年 国学院大学文学部卒業。在学中は山岳部に在籍。
1962年5月 東京中野に登山道具店「アポロ」を開店。
1967年～ 登山研修所講師を務める。以来、1997年までの31年間の長年にわたり講師を務め、数多くの学生、講師を指導してきた。とくに74～97年(95年を除く)の23年間は主任講師の重責を務める。
1969年 Mt.アダムス、Mt.セントヘレンズ、Mt.レーニア、Mt.スチュアート(以上、US)、Mt.ロブソン(カナダ)
1973年 アンナプルナI峰(ネパール)
1980年 Mt.ヘイズ南峰(アラスカ)
1985年 バグラッティールI峰(インド)
1988年 雪岳山(韓国)
1992年 サンディンカンシャ峰(中国チベット自治区)
1997年 文部省登山研修所創立30周年記念式典において文部大臣より感謝状授与
2006年 一緒に店を営み歩んできた妻の看病のため、40余年続いた「アポロスポーツ」を開店。
2012年11月21日 かねてより加齢中だったところ逝去。享年79歳。
日本山岳会永年会員(会員番号4934)、理事、評議員を歴任。文部省(文部科学省)登山研修所専門調査委員、運営委員、日本山岳協会指導常任委員を歴任。『高みへのステップ』(文部省、共著)『露營生活手帳』(山と溪谷社)『空にたたよう峰』(アポロスポーツ)の著作がある。

鬼軍曹、松永敏郎さん

金田正樹

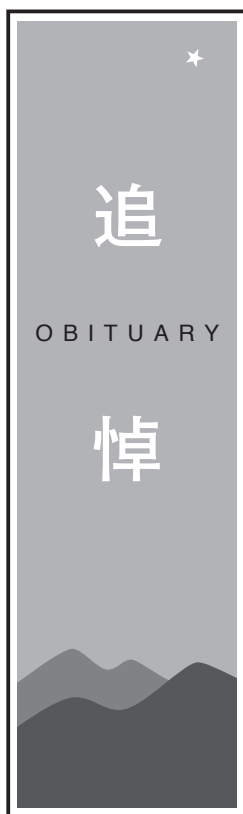
ある3月の信濃路。前国立登山研修所所長の柳沢昭夫氏の葬儀が終わって、松永敏郎さんと私は新宿行の「特急あずさ」車中にいた。これが松永さんと一緒にいた最後の時間になってしまった。

「俺が死んだら弔辞は柳さんにやってくれて冗談で言っていたのに、それが逆になってしまったよ」と、白いあごひげをこすりながら

追

OBITUARY

悼



言った。このとき奥様の介護のために登山用具の店「アポロ」を閉店したことも初めて聞いた。山では「鬼軍曹」と言われた松永さんだが、「俺は女房に苦労かけたから」とボツリと寂しそうに言ったあの顔は、未だ脳裏に焼き付いている。登山研修所の開設が昭和42年。

松永さんが研修会にデビューしたのも同年8月の高等学校登山指導者春山研修会であり、創設時から指導的立場にあった人だ。当時の講師には日本山岳界のそうそうた

る名前がある。横有恒、徳久球雄、山崎安治、今西錦司、大塚博美など。私がデビューしたのは昭和47年3月の大学山岳部リーダー冬山研修会で、主任講師が松永敏郎、講師は湯浅道男、村井葵、井上治郎などがいた。雪の深い3月の大日岳で学生が転倒して2名が骨折。さすがリーダーの松永さん。私が応急処置をしている間に無線でテキパキと雪上車や病院に連絡をと

きはそういう言葉づかいと態度が大切だ。おぼえておけ。学生は足が小刻みに震えていたようだった。松永さんは教える立場と教わる立場がナアナアではダメで、きちんと一線を引くべきと考えていた。とくに山の団体生活のなかでは大切だと言う。体育会系、軍隊的にも思われる言動であるが、たとえば制動確保のような山の技術は友達から教わるようではうまくいかない。立場のけじめをつけなさいということだった。

剣沢には研修所の前進基地があり、講師はこの小屋泊まり。学生はテント生活。「飯できました」「石油ください」と小屋に入ってきた学生に、松永さんの電光石火の雷が落ちる。「おい！人の家に入るときはごめんどさいとか、入ってよろしいでしょうかと一言あるのが常識だろう。もう一度やり直し」。学生は鳩が豆鉄砲でも食ったような顔をしている。再度ドアを出てノックした後に「何班の誰ぞれです。夕食ができました」「よし、それでいい。先輩に物事を頼むと

研修会が終わると、いつも富士駅近くの寿司屋で講師の打ち上げ会がある。主任講師としての重荷がおりた松永さんは、孝行親父の1人ではなかった。新鮮な魚を美味しくそうに食べながら、仲間達と楽しくわいわいと過ごした。そこには終始笑顔の松永さんがいた。登山研修所の創設期から、日本の安全登山のために指導者を数多く育ててくれた松永さんの功績は大きい。私自身は研修会で沢山の山やさんと知り合ったことはひとつの無形の財産だと思っている。もちろん松永さんもその一人。楽しかったよ、松永さん。ありがとうございました。冥福を祈ります。

N 東北 S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

伊藤秀五郎詩集『山の風物誌』作曲される

高澤光雄

伊藤秀五郎氏は明治38年に横浜で生まれる。大正11年に北大予科に進学、文芸部に所属し、『桜星会雑誌』や『北大文芸』に詩の投稿を続け、発足したばかりの札幌シンフォニーオーケストラ(現・北大交響楽団)ではホルンの奏者。

スキー部、旅行部にも入部し、登山に熱中。15年11月に北大山岳部を創設し先駆的な登山を实践、昭和3年6月に『北大山岳部々報』を創刊。同年9月に東京詩学協会から詩集『風景を歩む』、著名な『北の山』は10年5月に梓書房から出版された。

伊藤氏は日本山岳会理事を昭和7年から3年間、評議員を25年から49年までに19年間、46年から北

海道支部長を4年務められ、50年に名誉会員に推挙された。

私が初めて伊藤氏にお会いしたのは昭和35年10月、札幌医科大学教授兼進学部長として就任されたときである。当時、医学書の販売員をしていた私は毎週のように教室を訪れ、山の話を聞きながらお世話になっていた。伊藤氏が第四代支部長時代に私は支部委員を担当、昭和48年6月に十勝岳で日本山岳会第4回現地支部長会議を開催。幸運にも今西錦司会長ら全国から95人を迎えて山に登り、このときが最後の登山となった。

昭和50年10月、日本山岳会の企画・編集で『覆刻 日本の山岳名著』が大修館書店から発行され、当然ながら名著『北の山』も加えられていた。伊藤氏は大変喜ばれ、亡くなる1カ月前に入院中の札幌医大付属病院から北海タイムスに寄稿され、51年1月9日の朝刊に

「北海道文化はいつ成熟するか」を発表。要点を抜粋すると、『日本風景論』『日本アルプス』はすでにわが国近代登山の古典的名著だが、刊行後70年の今日、『日本山岳名著』として覆刻されることを予期した著者は1人もあるまい。

天才は作られるものではなく生まれるものだ。未来の可能性をもつ北海道で、植民地的卑屈から脱却して、そこに成熟した文化が誕生するのはいつか、これから世界に通ずる文学の生まれる日こそ、まさに北海道文化の成熟を示す証である。北海道から新しい文学出よ、わが国の文学に革新的な生命を吹き込む作品の誕生である：「と、若者たちに提起している。

没後、『北の山 続篇』を昭和51年12月に林和夫、望月達夫両氏の編集。詩集『山の風物誌』は翌年3月に串田孫一氏の編集装丁で、それぞれ茗溪堂から出版された。

この詩集が没後36年を経て作曲家・中原健二氏によって作曲されたのである。さぞかし伊藤氏は天国で驚喜されたことであろう。中原氏は登山を好み、元・国立音楽大学教授で田淵行男写真集『山の季節』の詩文、伊藤整や鳥見迅彦

の詩も作曲している。『北の山』および『北の山 続篇』を読み、今回の『山の風物誌』によって豊かな抒情と詩心に触れ、北海道の自然や風土に魅了されて作曲された。

歌曲集『空の歌』は「天空景色」睦月から師走まで12カ月をそれぞれ5行詩で詠んだもの。女声合唱組曲『早春の抒情』は「雪解」7行詩、「福寿草」15行詩、「しらねあおい」11行詩、「水芭蕉」11行詩、「雲」6行詩でそれぞれ付曲した。なお、この初演は平成25年6月22日に東京都府中市のウィーンホールでコンサートが催される。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

総務委員会

第44回新入会員オリエンテーション開催

10月27日、第44回新入会員オリエンテーションが開催された。対象者は14970～15188番の219名で、参加したのは北海道(1名)、茨城(1名)、埼玉(1名)、千葉(2名)、東京多摩(8名)、静岡(3名)、東海(1名)、関西(1名)、四国(2名)の各支部、および首都圏10名からの30名であった。今回は北海道や四国など遠方からの参加者があり、最年少者は静岡支部の高校2年の女子生徒だ。

オリエンテーションは13時半、高原総務担当常務理事の開会のあいさつで始まり、尾上会長が歓迎のことばを述べた。会長は日本の山の歴史、および日本山岳会の歴史を紹介し、入会を機に日本山岳

会の活動の輪に加わって、率先して「クラブライフ」を楽しむようにとあいさつした。

続いて総務担当の永田理事により、プロジェクトを使って、日本山岳会の会組織と活動全般にわたる説明が行なわれた。上高地山岳研究所や、山岳保険の案内の後、アルパインスケッチクラブをはじめとする9つの同好会の紹介があった。

その後、会長を囲んで記念写真を撮影、山岳会のマークの入ったグッズ類の販売が行なわれた。

休憩を交えて、新入会員の自己紹介と意見交換が行なわれた。司会進行は今田総務委員長。会員番号順に3分間のスピーチが始まった。今年もさまざまな、職歴、山歴の人が入会し、学生時代に西表島でイリオモテヤマネコの研究に専念した人や、山岳救助活動経験者、多くの海外登山を経験してい



会長を囲んで記念撮影

る人から、山登りを始めてまだ2年という人まで実に多彩で、これからの「クラブライフ」に期待を抱いているようであった。

17時過ぎから懇親会が始まった。西村副会長のあいさつ、乾杯の音頭でスタート。司会は筆者が担当した。新入会員からは次々にご自慢の地酒が披露され、四国の会員からは徳島のすだち焼酎。歓談の輪が広がり、同好会代表者からの勧誘に、早くも入会した会員がいたようだった。活発な情報交換がなされ、参加者は大いに親睦を深めたようであった。また今年も、静岡支部の長田会員から、多くの

図書委員会

第30回図書交換会を開催

会員と交歓し有意義な時を過ごしてほしいと、みかんをお送りいただいた。感謝申し上げます。
18時半、西村副会長の閉会のあいさつで、オリエンテーションは大盛況のうちに幕を閉じた。
(岡田陽子)

「図書交換会の本って、図書室の知らない本?」「図書交換会の売上げは、図書委員会に入るの?」
今年度は初めて年次晩餐会会

場で開催し、そんな疑問の声も耳にしたので誤解を解いておきたい。

まず、本はすべて会員から出品されたものである。開催の半年ほど前の会報『山』で出品を募っている。出品された本は一冊ずつ確認して目録を作り、頒布価格も図書委員がつける。皆さんが「安い」と驚かれるように、古書価格の半分から三分の一、もともとの定価が高い本や全集などは更に驚く安さである。ネットの出現で価格破壊が起きている古書市場では、高い本が売れないという事情もあるけれど、原則として、図書交換会はいくらでも会員サービスの行事であり、営業ではないからできることである。

また図書交換会の売上げの8割は出品者へ返し、作業や手続きに残りを当てている。もともと「金額ではなく、大切な山岳書なので、山の本が好きな人の手元に渡ってほしい」というのが、出品者の本へ寄せる気持ちである。私たちはその出品者の思いを、新たな「本好き」へ届けたいという願いのもとに図書交換会を運営している。

さて、交換会の報告をしよう。本年度の出品は430点で、事



晩餐会で催された図書交換会

前の申込は50名。ここまでは例年とあまり変わらないが、晩餐会当日の会場での申込者が110名にふくれ、抽選の倍率が高くなった。人気本を紹介しよう。『異人たちの日本アルプス』『黒部溪谷』『もしかある日』がともに18名の申込でトップ、『原野から見た山』が16名で続く。そして『ヒマラヤ―巨峰14座と高峰』と『Illustrated Atlas of the Himalaya』が14名の申込。そして『奥秩父研究』『火花の見た家』『深田久弥の山がたり2』が13名と続いた。

4点の入札本の方は『ヒマラヤへの挑戦 1783-1939』が

3500円、『伊那谷木曾谷』3995円、『辻まこと山とスキーの広告画文集』1万1000円、『Scrambles amongst the Alps in the Years 1860-69』が9500円で落札された。入札はやはり多くの参加者を得て行なうと盛り上がる。

会場が変わったこともあり、今回は図書委員の進行係がくじを引いたのだが、やはり参加者本人がくじを引く醍醐味を味わってもらいたかったと思う。それでも「来年も年次晩餐会でやってほしい」「たいへんな作業だと初めて知った」と何人もから声をかけられた。一方で「今年は倍率が上がり、届いた本が少なかった。年次晩餐会でやるのはこれっきりに」とメールをくれた常連さんもある。

ネットで目的の本を安く探すという方法もあるだろう。でも、ふらつと本を目にして、手にとつて中身をパラパラ読んでその本がほしくなるといふ出会いが、本との最高の出会い方だ。そんな楽しさを少しでも感じてもらえたとしたら幸いだ。

(三好まき子)

自然保護委員会

写真が語る山の自然―今・昔―「岳人」との「コラボ」が実現

近年、世界各地の高山帯で植物群落の変化あるいは動植物の分布標高の上昇等が報告されるようになりました。日本も例外ではありません。たとえば、アポイ岳ではハイマツの面積が広がり、希少種が生育するお花畑が急速に減少しました。南アルプスでは高山帯にまで登ってくるようになった鹿の食害で植生が変化しています。大雪山五色ヶ原ではチシマザサの分布が拡大しており、融雪時期の早期化に伴う乾燥化が一因だとされています。日本のように互いに隔離され、ごく限られた高山帯を生育地とする植物は、逃げ場がなく、その存続が危ぶまれています。

これらの変化は過去の記録があるからこそ検出できるのであり、多くの高山地域では変化の有無を判断する科学的な調査が不足しています。この不足を補える記録は唯一あり、それは過去に撮影された写真です。写真は調査記録に代わる客観的な記録となり得、過去に撮った写真と最近撮った写真の

比較ができれば、植生の変化を検討することが可能となります。高山帯は昔から登山を楽しむ人々によって写真が撮られてきた場所です。山岳写真の多くは、絶景とされるポイントで撮影されていること、写っている山がランドマークになり得ることから昔の写真でも比較的撮影場所が特定しやすいのです。つまり同じポイントから最新写真を撮影することが可能なのです。

そこで自然保護委員会では、登山家の方が撮影した過去の山岳写真を収集し、デジタル化、データベースを作成しました(図1、<http://mountain-photo.org/>)。

寄せられた写真は約2000枚、北アルプス、南アルプス、中央アルプス、大雪山の山脈に加え、苗場山、飯豊山、八甲田山の東北の山々など、全国各地の写真が寄せられました。現在、情報整理をしながら順次データベースで公開しています。

また、記録として活用できるように撮影年月日の分かる写真を掲載。さらに、撮影年月日で検索、地図上で写真を探す、閲覧者が写真を投稿できる機能もあります。この



図1 作成した山岳写真データベース

データベースにより植生変化の有無を検討する基盤を整えたいと考えています。

そしてこのたび、この山岳写真の収集について山岳雑誌『岳人』とのコラボレーションが実現。1月15日発売の『岳人』2月号誌上では、新旧写真の比較を通じて自然の変化の傾向をとらえる実例を紹介しています。

皆さん、データベースにぜひ最新写真をご投稿ください。登山する人みんながユーザーとして山の記録写真を共有し、写真撮影を通じて、みんなで山を観測できたらと考えています。

(下野綾子)

山の自然学研究会

ブータン、ヒマラヤ大自然とブムタン・ツェチュの旅

10月26日12時、「素朴な山岳文化のあり様の巡見」の旅がスタートした。一行16名は成田からバンコクに向かい、空港近くのホテルに宿泊。27日早朝、ブータンに向けて出発。パロ空港で現地ガイドの出迎えを受ける。パロ・ゾンを見学後、首都ティンプーに向かう。ここでは、週末に開かれている市場(サブジ・バザール)と、王様の執務室でブータン仏教界の総本山でもあるタシチョ・ゾンの2カ所を見学。

28日、ティンプーからポプジカに向かう。早朝、3150mのドチュラ峠着。ブータン最高峰のガンケル・プンスムはじめテーブル・マウンテンなど、雄大な山岳展望を楽しんだ。プナカでは、プナカ・ゾン、チミラカンを見学。

ここで、ガイドから、ブータンの国民総幸福(GNH)を構成する4つの柱についての説明を受けた。ポプジカでは、ブータンのニンマ派最大拠点のガンテ・ゴンパを見学。途中の峠からは、チョモ

ラリ、ジチュダケを望むことができた。

29日、ポプジカはオグロツルの飛来地であるが、残念ながらツルの姿を見ることはできなかった。今日はブムタン地方への移動、ヒマラヤの高峰が望めるペレラ峠(3360m)を越える。途中、博物館や織物のショールームを見学。夕食後、ブータン伝統のお祭りであるツェチュ「ジャンパ・ラカン・フェスティバル」を見学、夜の舞と火の祭りを楽しんだ。

30日、午前中は昨夜の祭りの続きの踊りを、午後は、タムシン・ゴ



パロゾンを背に(通りかかった現地の中学生と一緒に)

ンパを見学。夕食は、地元の農家の仏間での家庭料理をご馳走になる。

31日、ブムタンからトンサを経てプナカに向かう。途中チウムバレーでのお祭り「ブラカール」を見学。伝統の仮面舞踏などの地方の素朴な祭りを見学。プナカ郊外のホテルに宿泊。

11月1日、プナカからティンプー経由でパロに向かう。ティンプーでは、ブータンで最も盛んなスポーツであるアーチェリーの試合を見学。市内見物と買い物の後、パロに向かう。

2日、早朝、山岳展望を期待して、チェレラ峠(3800m)へ。

好天に恵まれ、ジュチュダケ、チヨモラリが望まれた。さらにカンチエンジュンガの山頂の一部も見え、という幸運に恵まれた。その帰路に、野外での朝食。朝の爽やかな空気のなかでの朝食は素晴らしいご馳走であった。

このブータンの旅の最後のイベントは、断崖絶壁に建つタクツァン僧院(3100m)へのハイキングである。展望台から先は、石の階段状の道を大きくアップダウンし、僧院に到着。参拝と見学。

ブータンでの最後の晩餐は、やま学研代表の河西さんの誕生日ということで倉持さんの笛と、松川さんのオカリナ演奏も加わり賑やかなバースディパーティとなった。

3日、パロ空港から帰国の途に。4日、成田着。全員笑顔で無事帰国した。

幸せの国ブータンの旅は、終始天候にも恵まれ、質素な生活を営んでいる素朴な人達と美しい自然に接して心温まるものであった。この美しい心と美しい自然が変わることなく、いつまでも残ることを祈念したい。

(富澤克禮)

NPO富士山測候所を活用する会

設立から7年が経過

「NPO富士山測候所を活用する会」の設立から7年が経過しました。この会の前身である富士山極地高所科学研究会、さらには2003年にその使命を終えたゆえ測候所を撤去する予定との発表に対して日本山岳会会員の高所医学関係者数名でその存続を気象庁に働きかけていました。故橋本龍太郎会員には同じ山を愛する者の立場から貴重なアドバイスを情報をもとに都度頂戴したり、理事会執行部の配慮で山岳4団体の定例会で紹介させていただいたり、日本山岳会には何かにつけてサポートしていただいた経緯があり、感謝に堪えません。宮下前会長、尾上現会長、そして橋本様夫人にも役員をお引き受けいただいています。また、学生部のヒマラヤ登山出発前の高所トレーニング参加、高所医学研究の被験者としての会員の参加などもあります。

このNPOは、測候所を研究の場として使用したいと望むさまざまな分野の研究者が集まって設立

日本山岳会団体傷害保険 加入のおすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

資料請求先

東京海上日動火災
グループ代理店

株式会社東海日動パートナーズ東京

団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Mail: a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp

TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809

したものです。気象庁の公募に手を挙げて1期3年間の貸与契約のもと、2007年7～8月の夏期観測・研究を第1回として、09年9月に第3回を終了、2期目の契約となった3年間の最終年度の夏期観測・研究も無事に終えることができました。

この間、08年1月の第1回成果報告会開催に次いで毎年1月にその年度の成果報告会を行ない、第6回目は13年1月27日に東京大学小柴ホールでの開催を予定しています。さまざまな分野の研究者をはじめ、富士山測候所の活用分野は多岐にわたっています。独立峰

であるがゆえに大陸からの汚染大気を観測することができ、観測タワーとしての役割も発揮します。

また、日本最高峰で、かつ、ヒマラヤなどの高所登山で最初の高所障害が発症する高度であるため高所医学研究、高所順応トレーニングの場として、さらには宇宙線の観測所としてふさわしいフィールドです。

加えて極地としての富士山頂はその過酷な気象条件が求められて各種機器などの実証実験に使われます。

また、富士山頂は永久凍土がまとまって存在する本州で唯一の場所であることから、深さ10メートルの地温観測孔を掘削して温度を連続モニタリングすることにより地球温暖化の実証的研究につながります。最後に雄大な自然は、体験教育の場を提供してくれます。

参画しているのは、大気化学、放射線科学、高所医学・高所トレーニング、大気電気(電)、永久凍土、青少年教育などに携わっている研究者です。過去5年間の夏期観測・研究の延べ参加者数は1853名にのぼります。

このように測候所の利活用が活

発に行なわれていることは、会員および支援をいただいている方たちの力が結集した賜物であり、いま、世界文化遺産としての登録を目指している富士山に研究・教育という花を添えることができるのはこのNPOであると自負しています。

一方、収入内訳は、会費、助成金、業務受託、(利用者の)負担金などであり、夏期のみ運用でも年間3000万円の支出であり、複数年にまたがる助成金の獲得、認定NPO法人格取得(すでに申請済み)による寄付金賛助会費を含む)などによる安定的な収入の確保が課題であります。

会員の皆様には山頂での研究活動へのご参加、あるいは、正会員・賛助会員として研究者をサポートしていただくなど、今までも増してのご協力・ご支援をお願いいたします。

左記ホームページより入会案内、入会申込書をダウンロードすることができます。

([http://npo.fuji3776.net/help/](http://npo.fuji3776.net/help/join.html)
[join.html](http://npo.fuji3776.net/help/join.html))

(NPO法人富士山を活用する会

副理事長 堀井昌子)

支部

だより

東海支部

第4回森の音楽祭2012

東海支部では、日本山岳会会員と一般公募のボランティア活動により、森林の整備・自然環境の保全を行なうとともに自然保護の向上と普及を図るため、平成10年に「猿投の森づくりの会」を発足させた。

以来、瀬戸市の山路地区にある愛知県有林を借り受けて、森の整備・保全活動をしてきた。活動の一環として一般の方にも森に来ていただき、定期的に森の観察会を開いているが、より一層森に親しんでいただける機会を持っていたくため森林のなかでオーケストラ演奏を楽しんでいただくと同時に、子ども達には日頃の練習の成果を発表できる場を提供している。4年前から毎年、東海中学・高校の生徒でつくる東海学園交響楽団

を招き、森のなかでのコンサートを開催。

平成24年は瀬戸市・公益社団法人緑化推進機構・中日新聞との共催で、愛知県の後援を得て、10月27日に猿投の森のなかの特設会場で開催した。交響楽団がロシアの作曲家グズノフの交響曲「変ロ長調作品55」を演奏。来場した340人は、木の根元などに座って静かに聞き入っていた。ある参加者の一人は「トンボが飛び、せせらぎの音が聞こえる緑のなかでオーケストラが聞けて元気をもらえた」と言っていた。

グズノフの交響曲を楽しんだ後は、オーケストラの伴奏に合わせ、参加者全員で「雪山讃歌」を合唱して午前の部を終了。各自持参のお弁当を食べたあとは、200名程の方が森の観察会に参加。10班に分かれて「自然観察員」ならびに「森のインストラクター」に

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。



東海中学・高校の生徒でつくる東海学園交響楽団の演奏

よる森のなかの樹木・草花の説明・解説を聞きながら2時間ほどの森の散策を楽しんでいただいた。参加者にアンケートをお願いしたところ、99％の方がオーケストラと森の散策を楽しまれた様子。来年もまたぜひ参加したいとおっしゃる方がほとんどであった。

(箕浦靖夫)

四国支部

剣山山系、いざり峠のケルン積み、および地蔵ノ頭南稜のロープ張り替え作業

四国支部では11月18日、剣山山系のいざり峠でケルンの石積みと

地蔵ノ頭の南尾根で固定ロープの張り替え作業をした。地元のNPO法人剣山クラブとの共同作業だった。ここ数年、剣山山系の剣山三嶺、天狗塚(いざり峠周辺)で遭難事故が多発している。主に冬の積雪や天候悪化による濃霧などで、主稜線から下山方向を見失いやすいためだ。

四国支部の会員11人は、前夜に徳島県三好市にある菅生ロッジ(四国支部の仁木会員管理)に泊まった。朝5時半に起床して7時にロッジを出発。標高が1000mを超える西山林道にある天狗塚・いざり峠登山口では気温は0度近くまで下がっていた。出発から50分で1476mのピークに到着した。木の間から稜線を見ると白い。早く霧氷を見たい気持ちにはやり、少しの休憩で出発した。

幹に苔の生えたウラジロモミが優占する樹林帯を過ぎると低木帯に霧氷が見え始めた。ミヤマクマザサの急な坂道を所々、霜を踏みしめて登ると太陽に当たって輝く牛ノ背の笹原が見え、そしてその北斜面にはすべての木々に張り付いた霧氷が光っていた。まもなく霧氷のトンネルに入り、さらに登

ると左に西熊山、右に天狗塚が見えてきた。斜面が緩やかになって薄く霜が降りたような笹原のなかを進むと、1780mのいざり峠に到着した。出発から1時間50分が経過していた。

峠は冷たい風から身を避けるものは何もない。荷を下ろして石を拾い、背負うザックを担いでさっそくケルンの石を集めにいく。石はいざり峠から下って天狗塚山頂に行く途中の岩場にあった。先に山頂を踏み、帰りは岩場で石を拾い峠に向かって登っていく。石を積み人、また下って石を集めに行く人に分かれて作業を進めた。3度、往復するころにはケルンが地



いざり峠のケルン積み

上から80センチほど立ち上がって姿を見せた。

お昼の弁当を食べた後、ケルンの座りが悪いので、もう一度積み直しをした。崩れないように大小の石を組み合わせて積むのは意外と難しい。完成した高さ約1メートルのケルンの前で記念撮影をした。

いざり峠と地蔵ノ頭は約10分の距離だ。霧氷に囲まれた地蔵ノ頭の少し下には小さな地蔵尊が建っている。1841年に大飢饉で苦しんでいた祖谷の百姓が厳しい年貢の取り立てに対抗して立ち上がったが、首謀者は捕えられて斬首されさらし首にされた。地蔵尊は首謀者を供養するために立てられたものだった。地蔵尊に両手を合わせた後、ロープの張り替え場所まで南尾根を下った。今まで設置されているロープはまだ使えそうだったのでそのままに残して、新しいロープを2本セットして作業を終えた。いざり峠に立てたケルンの横を通過して来た道を引き返し、14時に登山口に戻った。ケルンと固定ロープが1年を通して登山者の安全に貢献することを願ってやまない。

(宮本良之)



図書紹介

文・菊池俊朗／写真・日本山岳写真協会松本・北陸支部ほか
『北アルプスの溪谷をゆく』



2012年7月
信濃毎日新聞社刊
A4判 152頁
定価 2100円

山岳景観といえは、一般には稜線上からの鳥瞰、展望であろう。それらは雄大、かつ壮大な山並みで、登山者を魅了させ素晴らしい景観である。しかし、北アルプスにとって、顕著に稜線を際立せるのは溪谷であり、河川であろう。ここには、山を撮る写真愛好者には欠かせない無限のテーマが潜在しているのだ。

このように、稜線からの景観を溪谷に目を追いやると、そこには移ろう四季の美しさ、北アルプス特有の「自然の美」が秘められてい

る。さらに敷衍すれば歴史や伝説、また文化や産業が育まれているの

に気がつくことであろう。

本書は「山あれば谷あり」、構成は7章からなり、その代表格は何といっても黒部溪谷。下の廊下、十字峡、S字峡など。昭和初期「黒部の父」、冠松次郎は「溪谷跋涉」と言う登山に新しいジャンルを確立、多くの登山者の知る所となった。第2章は、立山を擁する立山カルデラ、常願寺川など。第3章に槍ヶ岳に端を発する梓川や高瀬川。そして犀川と合流して信濃川に注ぐ。流域の風景は、一般の登山道から見られない溪谷美が点在している。つまり、この地方の溪谷や沢を歩いた人のみぞ知る素晴らしい景観と言う。

第4章には、古くからの溪谷美を誇る中房溪谷にスポットをあてる。先の高瀬川は、鹿島川、箆川など含めて第5章でまとめられて

いる。さらに第6章で白馬大池や姫川を紹介し、そして第7章の高原川へと続く。この川は、登山者にはあまり馴染みはないが、蒲田川周辺の溪谷として欠かせない穴場だ。

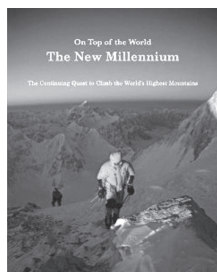
番外編では、乗鞍岳を源流とする大野川、溪谷に流れる三本滝などいくつかの滝や池を紹介。いずれも乗鞍岳を背景に素晴らしい写真の舞台になっている。

それぞれの章の解説文は、菊池俊朗さん。菊池さんは信濃毎日新聞社OBで、山岳ジャーナリストだ。本書では歴史から現代につながる統人行事まで、あらたに取材した箇所も少なくないという。

さらに本書を臨場感のあるものにしてくれたのは「写真のもつ力」であろう。日本山岳写真協会という組織力がフルに発揮されている。紹介や説明的な写真にとどまらず、さすがに山を撮るカメラマンの視点で、しかも「作品的」にもよく捉えている。全ページにわたる写真掲載は、約200点以上あるという。まさに、ビジュアルで北アルプスを楽しめる写真文集だ。

(羽田栄治)

Richard Sale／E.Jurgalsk 他・共著
『On Top of the World
The New Millennium:
The Continuing Quest to Climb the
World's Highest Mountains』



2012年4月
Snowfinch Publishing刊
23×29cm 248頁
定価 £30

著者の一人リチャード・セールはフランス隊がアンナプルナを初登頂した50年後の2000年に、ジョン・クレアと共著の『A history of the 14 8000m, the world highest mountains』を発行している。

その本が出版されて以降10年間に公募隊による登山が急増した。ヒマラヤの高峰に立つことだけを目指す人たちは、従来のヒマラヤ登山を熱望してヒマラヤ山塊に分け入った人たちとは違った感覚なので、倫理問題も重要な課題として浮上している。しかし高峰14座は各人各様のスタイルで登り続けられており、本書はそれらを踏まえてこの10年を回顧し、将来に想いを馳せている。

本書の特徴は、「序説」、「アンナ

プルナ」、「エヴェレスト」、「ナンガ・パルバット」……「シシャ・パンマ」と初登頂された順に14座が続き、「2011年と次期10年」、「8000メートル峰の各種データ」で構成され写真も豊富で読みやすくしていることだ。「アンナプルナ」では、フランス隊による人類初の8000メートル峰登頂成功を概説し、日本で登山家を魅了したエルブーグ隊長の登攀記「処女峰アンナプルナ」に関して、その後隊員たちの著書で明らかになった事実との齟齬なども指摘している。

また1950年初登頂以降2011年までの、主峰、中央峰、東峰の初登頂・初登攀ルート、登攀者名と国名、酸素使用の有無などの一覧表が付記されている。嬉しいことに、主峰、中央峰、東峰の3枚の写真に、これらの登攀ライオンが色別に記入されており、読者の理解を助けよう。初登頂時代の写真もあるが、多くが2000年以降の初登攀時に撮られた迫力ある写真だ。垂直の氷の壁をフリークライムする様子や南壁の大岩壁を登るクライマーなど高度の登攀技術を有する登山家ならではの写真に目を奪われた。

その後に続く「エヴェレスト」から「シシャ・パンマ」までの13座についても登山史を概説し、2000年以降のバリエーション・ルートの初登攀情報が盛り込まれている。

「2011年と次期10年」では、著者が直近の10年間でまとめている間に2011年の新たな情報を得たので追記の形で新情報を記すとともに今後の10年を展望している。パキスタンではヘリコプター代金が高騰した。2011年秋にGⅠ冬期登攀用に荷揚げした物資が盗難にあったこと、バルトロでは強風と厳寒で大変だったこと。今後はギャチュンカン、アンナプルナⅡ峰、GⅢ、GⅣなど7000メートル峰のバリエーション登攀が展開されるだろうと見ている。

「8000メートル峰の各種データ」には、2011年末までに14座に登頂したメスナー以下28名の詳細、10〜13峰登頂者、女性初登頂と無酸素登頂者、14座の登頂者・遭難者・死亡率などと細分化された見やすい一覧表がある。

豊富な写真と写真に記された登攀ルートをみるだけでも今日の高峰登山を知ることができる貴重な本だ。

(南井英弘)

図書受入報告(2012年12月)

著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
茂木完治・他(編)	海外週行研究：台湾の谷(1963-1993) 2007 (No.1)	232p/21cm	海外週行同人	2007	関西支部寄贈
茂木完治・他(編)	海外週行研究：韓国の谷と山(1983-2009) 2009 (No.2)	275p/21cm	海外週行同人	2009	関西支部寄贈
土佐アルパインクラブ	2004 PUMO RI (プモ・リ) 7165m 登山報告書	59p/30cm	土佐アルパインクラブ	2004	四国支部寄贈
尾野益大	徳島の静かな名峰	172p/18cm	尾野益大(私家版)	1995	四国支部寄贈
JAC四国支部	四国分水嶺	148p/21cm	JAC四国支部	2012	四国支部寄贈
尾野益大	シャクナゲ 夢の森：夫婦で育てた徳島「岳人の森」物語	99p/21cm	岳人の森	2008	四国支部寄贈
剣山クラブ(編)	剣山から考える霊峰と自然保護	52p/19cm	剣山クラブ	2008	四国支部寄贈
剣山クラブ(編)	四国山地のブナ	59p/19cm	剣山クラブ	2006	四国支部寄贈
佐々木民秀・他(編)	朝鮮半島最高峰・長白山登山報告書：平成23年9月10日～15日	50p/26cm	JAC秋田支部	2012	発行者寄贈
新妻徹	札幌の三角山から	/25cm	山と森の散歩道	2012	著者寄贈
宮原廣司(編)	登高：東京学芸大学登高会60周年記念誌	218p/30cm	東京学芸大学登高会	2012	発行者寄贈
京都大学学士山岳会(編)	西堀書簡(抄)：1951年12月～52年3月	83p/30cm	京大学士山岳会	2012	発行者寄贈
山本紀夫	梅棹忠夫：「知の探検家」の思想と生涯(中公新書 No.2194)	234p/18cm	中央公論新社	2012	著者寄贈
岡田健志・他(編)	針葉樹：一橋大学一橋山岳部創部90周年記念号第15号	396p/21cm	一橋山岳会	2012	発行者寄贈
池内紀	ニッポンの山里	254p/20cm	山と溪谷社	2013	出版社寄贈
フレッチャー(著) 芦沢一洋(訳)	遊歩大全：The New Complete Walker (ヤマケイ文庫)	974p/15cm	山と溪谷社	2012	出版社寄贈
皆川完一	文と山を思う：皆川完一先生遺文集	177p/21cm	「皆川先生の思い出を語る会」	2012	発行者寄贈
澤村貴和(編)	復興をめざす東北の高校生の富士登山(2012.7.21-23)	32p/30cm	HAT-J	2012	発行者寄贈
奥アマゾン探検隊(編)	奥アマゾン探検の記録 1973-76	328p/30cm	奥アマゾン探検隊	2012	発行者寄贈
山森欣一	日本のヒマラヤニストたち	301p/27cm	日本ヒマラヤ協会	2012	発行者寄贈
山岡光治	地図をつくった男たち：明治の地図の物語	263p/20cm	原書房	2012	出版社寄贈
富山県立山博物館(編)	企画展「石崎光瑠の山」写しこまれた20世紀初頭のインド・ヒマラヤ	56p/30cm	富山県立山博物館	2000	馬場勝嘉氏寄贈
富山県立山博物館(編)	企画展「ちょっと昔の学校登山」写真でたどる大正・昭和の立山登山	56p/30cm	富山県立山博物館	2005	馬場勝嘉氏寄贈
富山県立山博物館(編)	企画展「夏風に舞う」高山蝶と森の蝶ゼフィルス	72p/30cm	富山県立山博物館	2009	馬場勝嘉氏寄贈
富山県立山博物館(編)	企画展「木版文化と立山」時を越えて今も生き続ける立山の揺りもの	64p/30cm	富山県立山博物館	2012	馬場勝嘉氏寄贈
富山県立山博物館(編)	「立山火山は今・・・」地底からもたらされたもの	48p/30cm	富山県立山博物館	2006	馬場勝嘉氏寄贈



平成24年度第8回(12月度)理事会議事録

日時 平成24年12月12日(水)19時～

20時50分

場所 日本山岳会集会室

【出席者】尾上会長、西村・吉永副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、平井・浜崎監事

【審議事項】

1・日中韓三国学生交流登山2013年度計画について(森)

主な実施内容は、神奈川大学のクライミングボードを利用しての大会及び富士山の日帰り登山とし、実施時期は2013年8月下旬とする。その他、予算等を含めた具体案を平成25年1月に提出する。

(承認)

2・新版『日本三百名山登山ガイド』上・中・下(全3巻)の刊行に

ついて(収益事業・会員サービス検討PT)(節田)

2000～2001年に山と溪谷社から出版された同名のガイドブックをリメイクした「日本山岳会版」として2014年春に3巻をまとめて発売する。2014年5月に刊行を予定。各支部の協力を付帯事項とする。

(承認)

3・松本市・松本市美術館との展覧会共催提案について(尾上)

坪田松本市副市長、井上保会員(松本商工会議所会頭)、林新一郎会員(前岡谷市長)から当会所蔵の絵画・資料を展示する展覧会を松本市美術館で共催したい旨の提案があった。「日本山岳会所蔵山の絵画・資料展」(仮称)として、平成25年春に開催を予定。資料映像委員会に協力要請しながら進める。

(承認)

4・人会希望者について(高原)

(承認)

10名の入会希望者があった。

【報告事項】

(承認)

1・寄付受入報告について(小林)

11月14日以降、7件、計75万4500円の寄付があった(別添資料による)。

2・監事監査(中間)を11月19日に行なった。特に指摘はなかった。

(小林)

3・「資料の貸出に関する規程」(C-16)の誤記を修整した。(高原)

〈第10条1項4号〉(誤)20,000円(正)20,000円

4・平成24年度第2回支部長会議について(高原)

平成24年12月1日(土)10時30分より12時15分まで、品川プリンスホテルで開催した。会長挨拶、会務報告、会計処理の手引解説に続き、支部からの問題点や提案につき討議した。最後に、静岡支部より、来年度の全国支部懇談会は10月20日(日)～21日(月)に行なう旨の報告があった。

5・旅行業法勉強会(高原、古野)

11月15日、専門弁護士による、旅行業法に関する勉強会を行なった。支部担当者会議等で報告した。今後、具体的な展開のため、関係者で再度ミーティングを予定したい。

したい。

6・国有林野貸付地(上高地山研)の継続更新(3年)を行なった。(森)

7・平成24年度年次晩餐会について(高原)

出席者427名(昨年並み)、うち招待者は19名。28名の新永年会員発表、秩父宮記念山岳賞表彰、会長特別表彰、新入会員48名の紹介等があった。催事としては、図書交換会、また4組の講演会を行なった。どれも盛況で、グッズの売上 גם 好調だった。翌日の記念山行(愛鷹山系越前岳)には134名が参加した。

8・晩餐会招待者の同伴者参加について運用を定めた。(高原)

概要は、招待者(新名誉会員、新永年会員、秩父宮記念山岳賞受賞者、会長特別表彰受賞者)の同伴者の出席を、配偶者に限り認めるが会費は必要とする。ただし、秩父宮記念山岳賞受賞者の同伴者に限り招待とする。

9・広島支部への寄託図書リストについて(高原)

別添の通り、96冊の予定リストが図書管理委員会より広島支部へ提出された。

10・朝日新聞12月11日付けで、学

生部のインドヒマラヤ未踏峰初登頂が掲載された。(高原)

11・2013年はアメリカ人によるエベレスト登頂50周年にあたり、2月22日(23日、American Alpine Club)が記念祝賀会を行なう。案内状が届いた。(川瀬)

12・John Harlin III氏(元AAJ編集長)からの提案について(高原)

AAJはデジタル化して販売を開始、JANの電子出版事業への提案があった。多田デジタルメディア委員長が窓口。

13・NPO法人ヒマラヤン・グリーン・クラブより20周年記念事業への後援名義申請があり、承認した。(高原)

14・山と溪谷社より『山と溪谷』1月号記載のための資料撮影許可願があり、承認した。(高原)

15・原書房から『地図を作った男たち』明治の地図のものがたり』記載のための転載許可願があり、承認した。(高原)

16・日本共産党スポーツ委員会より「スポーツ奨励重点プラン」提案し発表した旨の案内があった。(高原)

17・小高山岳会より、東海支部パティーが行なった遭難救助(北鎌

尾根)に対して、礼状が届いた。(高原)

18・会報『山』12月号について(萩原)

晩餐会の報告、秩父宮記念山岳賞受賞の小泉弘会員の業績について、学生部のインドヒマラヤ未踏峰初登頂の報告などを掲載。

19・本年度下期に海外登山助成をうけた登山隊の現況報告(萩原)

キャシヤール登山隊2012(花谷泰広、馬目弘仁、青木達哉)南リッジからの初登攀に成功した。Shispare Expedition2012(平出和也、三戸呂拓也)悪天で断念。

Japan Langshisa Ri Expedition 2012(谷口けい、鈴木啓紀)中止。広島県山岳連盟アンプー1峰(6840m)5900m付近で退却。

Giri Giri Boys Patagonia Expedition2012(横山勝丘、増本亮)は今週出発。

【今後の予定】

1・支部事務局担当者会議を1月26日(土)〜27日(日)に行なう。(高原)

2・環境省が行なう東北海岸トレイル(仮称)についての意見交換会を12月20日に行なう。(高原)

節田理事ほか1名が出席予定。
3・海外登山助成金の申込みは12

月31日が締切。(高原)

4・四国支部の小島島水顕彰碑制作の寄付締切は5月末。協力をお願いしたい。(高原)

5・来年6月までの日程予定表の提示。来年度事業計画、予算提出の日程について協力要請。(高原、小林)

6・冬山天気予報を例年通り12月21日〜1月20日に行なう。(古野)

7・次期役員等(委員長含む)について、候補者の選定を。(高原)

8・日本山岳協会の新春懇談会の案内(平成25年1月19日)。尾上会長出席予定。(高原)

9・東京都山岳連盟から、気象データ収集の協力依頼、スポーツ指導者養成講習会の案内があった。(高原)

ルーム日誌 12月

3日 総務委員会 高尾の森づくりの会

4日 図書委員会

5日 集会委員会

6日 常務理事会 青年部

7日 学生部

10日 東京多摩支部 公益法人運営委員会 スキークラブ

11日	スケッチクラブ
11日	緑爽会 学生部 山岳研究所運営委員会 九五会
12日	理事会 山岳地理クラブ 休山会
13日	フォトビデオクラブ YOUTH CLUB
14日	二火会 支部活性化PT YOUTH CLUB 集会委員会
15日	山の自然学研究会
17日	総務委員会 資料映像委員会
18日	00回 図書管理委員会 スキークラブ
19日	三水会 青年部 つくも会
20日	科学委員会 公益法人運営委員会 01会
21日	山の自然学研究会 YOUTH CLUB
25日	フォトビデオクラブ 山遊会 指導委員会
26日	自然保護委員会 麗山会
27日	みちのり山の会 常務理事会
12月来室者424名	

会員異動(12月)

物故

浅山貞郎(3504)	12・12・15
梅木秀徳(5908)	12・12・19

杉山雄幸(10024)	12・12・23
伊藤秀雄(13709)	12・12・3
渡邊裕之(14144)	12・12・9
三小岩夫(14149)	12・12・5
田村 勉(14611)	12・12・9

INFORMATION

インフォメーション

◆登山リーダーのための救急救助講習

集会委員会

登山リーダーが救急救助に関し習得しておくべき知識、スキルおよびその習得方法などについて学びます。対象者は各種グループで登山リーダーを担う方、参加費は無料です。

日時 3月15日(金) 18時30分～20時30分

場所 日本山岳会 104室

講師 恵秀彦会員(医療委員会)

定員 先着40名

問合 高橋努

TEL 090(2906)4356

tom-tak@bk9.so-net.ne.jp

退会

市野瀬建二(8795)	関西
南里章二(9364)	京都・滋賀
岡本文男(11392)	京都・滋賀
中澤恵子(14774)	北九州
中野洋子(14816)	北九州

◆第22回山好きの山の絵展

アルパインスケッチクラブ

いつもザックにスケッチブックをしのばせて、思い立ったらそこがスケッチポイント。山のスケッチ・油絵65点などを展示します。

会期 2月17日(日)～23日(土)

場所 有楽町 東京交通会館2F

TEL 03(3215)6962

問合 齊藤幹雄

TEL 090(2634)3331

■訂正とお詫び

12月(811)号1ページ、4段、「マナスル登山隊長」は「マナスル登山隊員」の誤りでした。訂正してお詫びします。

◆編集後記◆

●少し前までヒマラヤ登山で専門家から気象データ、予報を扱っていたのは外国の専門家ばかりだった。それが今では、猪熊さんのデータを活用する登山者、撮影隊などが多数ある。国内ではツアー登山会社も利用し、また私たち一般登山者が個人で利用するシステムもある。ただ利用するのではなく、山岳気象に関心をもち、勉強するきっかけにもなれば、それも「山」を知る一歩となるのでは。

●このように登山を取り巻く様々な職業の方々がいるが、こういったプロフェッショナルが確立されていくというのをもた、登山が日本に文化として根付く力になると思う。新年号にふさわしい記事を読んだ。本年もよろしくお願ひいたします。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 812号

2013年(平成25年)1月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社